



農学研究科長・農学部長

田尾 龍太郎

受験生のみなさんへ

大学院農学研究科へようこそ

—農学とは—

農学研究科では、学生と教員が互いに刺激しあいながら、日々農学の教育と研究に取り組んでいます。農学は、一義的には農林水産業やその周辺産業での生産・加工に関わる課題を扱う学問領域ですが、生産に関わる生態系、すなわち農業生態系・森林生態系・海洋生態系の保全と資源の利用もその領域に含まれます。研究対象は分子・細胞レベルから地球上の生態系や物質循環系、さらには地域社会の人間活動にまで及んでいます。農学の目指すものの第一は、農林水畜産物の質や生産性向上ですが、生産環境の保全や生産に関わる社会のしくみの改良も重要な課題です。さらに、生物の生命維持の仕組みを基にした薬品、工業原料、機能食品、新素材などの開発や、カーボンニュートラル・マイナスや再生エネルギー生産への応用も農学で取り組む課題です。このように、農学は非常に広範な学問領域と言えます。

—「生命・食料・環境」—

農学研究科では、農学の対象を「生命・食料・環境」という3つのキーワードで表しています。現在、種々の生物を対象にさまざまな生命現象が解明されつつありますが、きわめて複雑な生命をめぐる謎は数多く残されています。農業生産性の向上や適正な環境保全にとって、生命現象の謎を一つずつ解明していくことが非常に重要です。また、人口増や地球温暖化による気候変動下で安定な食料生産を実現することも今後の大きな課題です。さらに、食料生産と環境保全は両立しがたいことも多いですから、環境と調和した食料生産、食料生産と調和した環境保全がますます重要になっています。

—連携・融合—

上でも述べましたが、生産性向上と環境保全の両立は難しい課題です。また、生産性向上と生産性安定も両立が容易ではありません。地域振興と地域の環境保全も同様です。このように、「あちら立てればこちらが立たない」というジレンマ・トリレンマは数多く、多くの場合、明確な解決策はすぐには見つかることはほとんどありません。相反する要素のバランスを取りながら現実的な解決策を見つけるには、経済学を含めた多面的で総合的なアプローチが必要です。そのため鍵が「連携・融合」です。本研究科がもつ幅広いポテンシャルが、連携と融合により掛け算で力を発揮しています。

—国際性—

農学研究科では従来から海外のフィールドを対象とした研究が活発に行われ、それを通して培われた異文化の包容と多様性の尊重が、農学の総合力を構成する重要な要素となっています。これからの地球規模の課題を解決する上で、国際的な協調は欠かすことができません。本研究科では、英語だけで学位を取得できる特別コースを開設して多くの留学生を受け入れているほか、最近ではASEANのタイやインドネシアの大学、そして台湾の大学とのダブルディグリープログラム（一定期間の学修により二つの大学から学位を取得できる）をスタートさせ、さらには、日本人学生の海外派遣を支援する仕組みをさまざまな形で用意し、国際化を積極的に推進しています。

—チャレンジ—

農学研究科は、男女共同参画の理念を尊重し、女性学生のさらなる増加に向けて真摯に取り組んでいます。また、博士後期課程学生の研究費・生活費支援を目的に、科学技術イノベーション創出に向けた次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）等に積極的に参画しています。それぞれの分野の専門性を深めていくとともに、人類の持続的発展に寄与する「生命・食料・環境」の総合力をもった人材の養成を目指しています。本研究科で学んだ多くの先輩は社会のさまざまな分野で活躍しており、OG・OBとのつながりも私たちの貴重な財産となっています。みなさんもぜひ本研究科の一員として、日本や世界が直面している健康寿命・飢餓・気候変動などの困難な課題の解決や持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けたチャレンジに加わってください。

